

大学正規課程で学ぶ留学生の発音不安と 専門科目パフォーマンスの関係性について

梅本 佳子*・徐 毅菁*

Relation between Pronunciation Anxiety and Performance of Foreign Students

Yoshiko UMEMOTO* and Yijing XU*

抄 録

大学正規課程で学ぶ留学生にとって、第二言語である日本語で専門科目の授業を受けることは、発音における心理的な不安により授業パフォーマンスを低下させる可能性が考えられる。また、自尊感情が低い人は第二言語不安が高い傾向があるという先行研究の例から、自尊感情が発音不安を緩和する可能性が考えられる。留学生の発音不安と授業パフォーマンス、及び自尊感情の関係を明らかにするため、発音不安、授業参加度、自尊感情それぞれの尺度を用いたアンケート調査を行い、定量分析により実証的に検証した。その結果、日本語発音不安が強いほど、学生の授業参加度が低くなることが分かった。また、発音不安は学生の成績に影響しないことが証明された。

キーワード：日本語発音不安、第二言語不安、定量分析、自尊感情

1. 問題提起

日本の高等教育機関で学ぶ留学生は2020年に新型コロナウイルス感染拡大状況を受け減少したものの、2019年まで上昇を続けており、今後も増加が見込まれている（日本学生支援機構、2022）。そのような状況に対し、大学正規課程の授業では留学生と日本人学生が共に学ぶ環境にあるのが一般的であるにもかかわらず、専門科目での留学生の授業成績は日本人学生と比べ同等とはいえない。留学生に

とって日本語は第二言語であるという条件は当然加味されるべきであるが、授業への参加度の低さも一つの要因として考えられ、留学生の授業のパフォーマンスの低さにつながっている可能性がある。筆者は日本語の発音への不安が留学生の授業での発話を阻害する一因として、パフォーマンスの低下を招いている可能性に着目した。そこから発話活動における発音の面での不安である日本語発音不安に焦点をあて、留学生の授業パフォーマンスへの影響を実証的に検証することにした。

* 筑波学院大学 経営情報学部、Tsukuba Gakuin University

これまでの理論研究において、留学生の日本語発音不安と授業パフォーマンスとの関連を実証する研究は限られている。また、日本語発音不安に関する研究は概して日本語習得上の困難を解決することに終始しており、大学専門科目にまで対象を広げ検証した研究は少ない。

しかし一方で、大学で学ぶ留学生にとって日本語はまずツールとして習得すべき言語であり、その先には日本語で専門科目を学ぶという目標がある。日本語発音不安は日本語の授業以外に、日本語で専門科目の授業を受ける際にも影響を与えることが考えられる。

以上のことから、本研究は留学生の日本語発音不安が日本語以外の授業において、個人のパフォーマンスにどのような影響を与えているかを問題提起し、実証研究を行う。具体的には、定量的に留学生の日本語発音不安と専門科目パフォーマンスの関係性を検証する。そのうえで、個人変数である自尊感情がそのメカニズムにどう影響をおよぼすかを模索する。

2. 先行研究と仮説

2.1. 先行研究

2.1.1. パフォーマンス

そもそもパフォーマンスという単語には行動と成果両方の意味が含まれており、明確な定義や統一的な見解が存在しない（徳崎, 2015）。しかし、経営学分野では「業績」と解釈することが一般的に定着している。たとえば、Kaplan&Norton (1996) のバランススコアコードで挙げられ、日本企業でも多用される KPI (Key performance indicator) でも、パフォーマンスを業績、つまりタスクの遂行結果として扱っている。それは、定量的に個人ないし組織のパフォーマンスを評価する際に、その評価の数量化に役立つ (Brudan, 2013) ためと考えられる。

以上のことから、本研究は専門科目のパフォーマンスを学生が当該講義の履修の結果、すなわち講義の履修を通じ知識やスキルを修得した状態と定義し、さらにその修得状態に対する客観的な第三者評価、すなわち GPA (Grade Point Average) により個々人のパフォーマンスを示すこととする。

2.1.2. 発音不安

学習者の感情が第二言語習得にどのように影響するかについては、古くから研究が行われており、特に第二言語不安についての研究は1970年代から始まっている（福田ら, 2022, p.92）。また、元田 (2004) によると、第二言語不安は第二言語の学習や使用、習得に特定の関わる不安や心配と、それによって引き起こされる緊張や焦りと定義されている。本研究においてもこの定義を踏襲する。

なお、第二言語不安の下位次元として、日本語学習全体における不安を扱うものを日本語不安と呼び、近年、数は多くないながらも研究が進められてきている。日本語不安の研究の中では更に、発音やリーディング、ライティング、スピーキングテスト等の下位次元に細分化されて扱われている（福田ら, 2022, p.95）。本研究ではそれらの中から、日本語学習者の発音についての不安に着目した日本語発音不安を扱う。また、以上に述べた、第二言語習得不安、日本語不安ならびに本研究の課題である発音不安の関係について、概要を図1のように整理する。

発音不安を含めた日本語不安の研究は、これまで学習者の日本語習得における不安の原因を探り、第二言語習得上の問題解決のために使用されてきた（小河原, 1999b/2000/2001a, 元田, 2004など）。そのため、主に日本語学習の成果や日本語学習者の不安軽減に主眼が置かれてきた面があり、日本語による専門科目の学修に及ぼす影響にまで議論が及ばなかった。一方、第1章で述

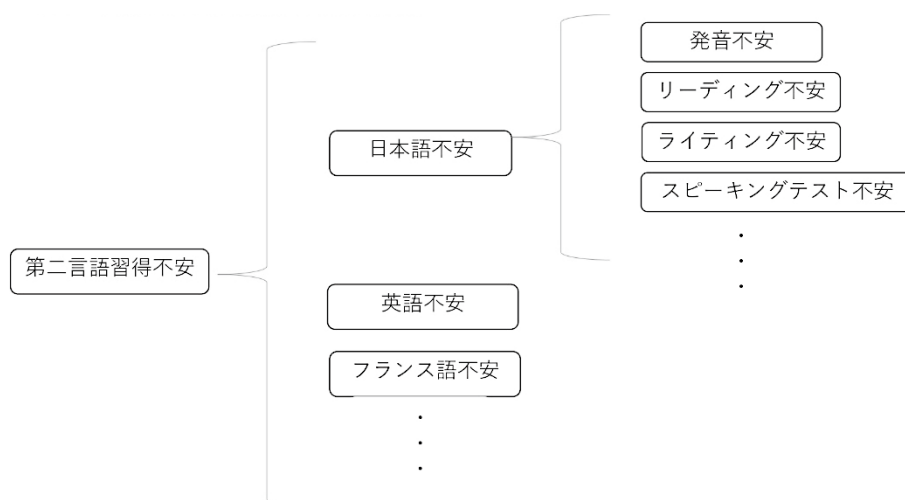


図1 言語習得不安に関する概念の整理

【第二言語学習の心理】(くろしお出版, 2022)に基づいて筆者作成

べたように、日本語学習者の学習目的は多様化しており、日本語を学習したその先について目を向ける必要がある。

これまでの先行研究において、日本語発音不安の定義も上述した影響を受け、日本語学習という限定されたシチュエーション(場面)という制限が加わったものとなっている。たとえば、小河原(1999b)は発音不安を「現実の、あるいは想像上の日本語発音指導・矯正場面において…(以下略)」としている。しかしながら、発音不安は第二言語不安同様、指導・矯正以外の場面での不安も含めるべきである。したがって、本研究で扱う発音不安については「学習場面で、教師・日本籍学生・外国籍学生などの他者からの発音評価に直面したり、もしくはそれを予測したりすることから生じる不安状態」と再定義する。

2.2. 仮説の導出

2.2.1. 発音不安の影響

総じて第二言語不安は目標言語の到達度と負の相関があり、言語習得に妨害的に働くものとして認識されており(福田ら, 2022,

p.97)、第二言語不安が高い学習者は教室活動や教室外での目標言語話者との対話に積極性ではないことが指摘されている(Yashima, 2002)。本研究で扱う日本語発音不安もまたそれに類するものである。これまでの研究において日本語発音不安を扱ったものは非常に少なく、尺度開発や実態調査についての先行研究はあるが、発音不安が実際の学修パフォーマンスにどう影響するかを実証した研究はない。発音不安の研究ではないが、戸田(2009)は学習者が発音上の問題をコミュニケーションの弊害と認識していることを述べており、授業でのパフォーマンスに負の影響を及ぼす可能性が窺える。

日本語発音不安の先行研究においては実証されていないものの、第二言語不安の先行研究の結果に基づき、発音不安が留学生の専門授業でのパフォーマンスにも負の影響を及ぼすことが仮説として考えられる。具体的には、発音不安はコミュニケーションが求められる授業への参加を阻害し、その結果当該留学生個人の成績の低下に寄与することが予想される。以上のことから、仮説1、仮説2を

導出する。

仮説1 発音不安は GPA に負の影響を及ぼす。

仮説2 発音不安は授業参加度に負の影響を及ぼす。

2.2.2. 発音不安と自尊心

自尊心は、個人の様々な行動に影響を及ぼす重要な心理的変数の一つである。内田と上埜（2010）によると、自尊心とは、自己受容などを含め、人が自分自身についてどのように感じているのか、その感じ方のことであり、自己の価値と能力に関する感覚および感情だと定義されている。また、Korman（1976）は、個人は、自らの自尊心を同水準に維持するように自分自身の態度や行動を決定すると指摘する。また、自尊心と外国語学習の関係も、近年ますます注目されるようになってきている（Rubio, 2014）。

例えば、元田（2004）は日本の大学で学ぶ留学生を対象に、日本語の発音不安と自尊心との関連性を調査した。調査の結果、自尊心が低い人は第二言語不安が高い傾向にあること、つまり第二言語不安と自尊心の負の関係が証明されたとしている。本研究も元田の結論に同意し、今回の課題である日本語発音不安においても、同様の関連性があると主張する。換言すれば、つまり自尊心が高いほど、発音不安が低い傾向にあり、その結果授業参加度が高く、また GPA においても高い傾向にある。以上のことから、仮説3、仮説4を導出する。

仮説3 自尊心は、発音不安が GPA に与える負の影響を緩和する。

仮説4 自尊心は、発音不安が授業参加度に与える負の影響を緩和する。

3. 調査

3.1. 調査の概要

上述の仮説を検証すべく、筑波学院大学に現在在籍し、かつ専門科目の学修が中心と考えられる2、3、4年生の留学生を対象にアンケート調査を行った。調査は2022年9月22日から同10月7日にかけて Google Form によるアンケートを QR コードで提示し、回答者を募った。回収された93名のデータのうち、年齢の回答欄に15と100を答えた回答者がそれぞれ1名確認されたが、顕著に大学の入学基準に満たしていないと判断し、サンプルから外した。よって、最終的に分析に用いた有効サンプル数は91名となった。

回答者の状況をまとめたものが表1である。91名のうち、62名（68%）が男子学生で、29名（32%）が女子学生である。平均年齢は同学年の日本人学生よりやや高めめの22.98歳（Min = 20、Max = 32、標準偏差1.795）となる。また、全体の89.91%が中国出身で、ベトナム出身がそれに次いで7.69%、その他の2.4%はエジプトやミャンマー出身が含まれている。日本語力は平均して日本語能力試験N2レベルに達しない程度に留まっていることが伺える。なお、成績に用いる GPA 得点は本人の了承のもと累積 GPA（入学後から算出時点までの全履修科目の GP の合計を履修総単位数で除した平均値）を使用した。

表2は各変数間の相関を示している。留意すべき点として以下2点が挙げられる。第1に、発音不安の下位次元のいずれも GPA との間に有意な相関関係が示されなかった。結果として発音不安が学生の成績に影響しないことを示唆している。第2に、対日本人発音不安と対外国人発音不安の間に非常に強い正の相関関係（ $\beta = 0.813, p < 0.01$ ）が認められた。本項に関しては次節で詳しく述べる。

3.2. 尺度

授業参加度

授業参加度の尺度は湯地 & 坂根 (2018) の授業参加度尺度をベースに、大学専門授業のシチュエーションに合わせて一部表現を修正した 8 項目を使用した。具体的な質問項目

ならびに信頼性係数は表 3 の通りである。

発音不安

発音不安の測定尺度は小河原 (2001b) によって提示されたものを援用した。ただし、本来小河原のこの尺度は、発音不安が生じる

表 1 記述統計

	最小値	最大値	平均値	標準偏差
GPA	1.24	3.56	2.34	.531
性別	0	1	.68	.470
年齢	20	32	22.98	1.795
国籍	1	3	1.19	.510
日本語能力	0	3	1.85	.770
授業参加度	1.88	5.00	3.55	0.66
対日本人発音不安	1.00	4.85	2.87	1.03
対外国人発音不安	1.00	5.00	2.64	0.99
自尊感情	1.80	4.60	3.34	0.68

N=91

性別：女性 = 0、男性 = 1、

国籍：中国 = 1、ベトナム = 2、その他 = 3

日本語能力：能力試験未受験 = 0、N3 = 1、N2 = 2、N1 = 3

表 2 相関関係

	GPA	性別	年齢	国籍	日本語能力	授業参加度	対日本人発音不安	対外国人発音不安
GPA								
性別	-.0343**							
年齢	-.129	.069						
国籍	.134	-.205*	.007					
日本語能力	.310**	.095	-.057	.021				
授業参加度	.224*	-.143	.055	.102	.087			
対日本人発音不安	.074	-.081	-.172	.155	-.013	-.278**		
対外国人発音不安	-.009	-.078	-.151	.083	-.018	-.324**	.813**	
自尊感情	-.063	.030	.126	-.173	-.169	.391**	-.0546**	-.564**

表 3 授業参加度の測定項目

私は、授業に積極的に取り組んでいた。

私は、授業を楽しく感じていた。

私は授業のとき、時間が経つのが早く感じた。

私は授業で発言することが嫌ではなかった。

私はディスカッションやグループワークで発言しないようにしていた。(R)

私は、授業に集中していた。

私はディスカッションやグループワークで自分の意見があっても、積極的に発言しなかった。(R)

私はよく授業を欠席していた (R)

信頼性係数 $\alpha = 0.752$

※ R は反転項目

場面として、①母国での日本語クラスにおける発音・矯正場面、②日本国内での日本語クラスにおける発音・矯正場面、③日本国内での日本人とのコミュニケーション場面、④日本国内での外国人とのコミュニケーション場面、の4つの場面を想定して構成されている。小河原（2001b）は発音不安が生じる場面として、①②を日本語クラスに限定しているが、③④については特に場面の限定がなく、日本国内のあらゆるコミュニケーション場面において適用することができると考える。本研究では、発音不安が専門科目の授業でのパフォーマンスにどのように影響するかについて調査するため、日本語クラスの発音・矯正場面を想定した①及び②は今回の調査目的から外れるものとした。よって本研究は日本国内における日本語学習者の対外国人

発音不安および対日本人発音不安という2つの下次元の質問項目群③④のみ採用し、学生の実際の環境に合わせて修正を加えた。

最終的に18項目から構成される日本語発音不安測定尺度を作成、使用した。更に、表4で示す通り、対日本人発音不安と対外国人発音不安の二因子構造が確認された。因子分析の結果は、尺度考案者の小河原の構想と一致しており、また、信頼性係数 α も十分な値を示している。

ただし、本研究は下記2つの理由をもって発音不安を1つの変数として扱う。第1に、仮説の導出段階では発音不安の下次元を論じていなかった。したがって、本研究の仮説を検証する際にも、発音不安を「対日本人発音不安」と「対外国人発音不安」に分けて重回帰分析を行う必要はなかった。加えて第2

表4 発音不安の測定項目と因子負荷量

変数名		第1因子	第2因子
対日本人発音不安	①私は発音が下手だから、日本人と日本語で話すのが不安である	.721	.408
	②日本人と日本語で話す時、自分の発音能力が問われるようで不安である	.796	.327
	③私は発音が下手だから、日本人と日本語で話したとき、日本人に笑われないか不安である	.673	.487
	④日本人と日本語で話したとき、私の発音を通じるかどうか不安である	.865	.294
	⑤日本人と日本語で話したとき、私の発音を通じなくて聞き返されないか不安である	.768	.469
	⑥日本人と日本語で話したとき、私の発音が原因で、重大な誤解が起きるのではないか不安である	.829	.271
	⑦日本人に何度言い直しても発音を通じないとき、どうすればいいか分からないので不安である	.792	.287
	⑧日本人と日本語で話す時、発音を直されるかもしれないので不安である	.607	.598
	⑨日本人と日本語で話したとき、私の発音を通じないと、今までの勉強が無駄に思えて不安になる	.577	.497
	⑩日本人と日本語で話したとき、私の発音が下手だと思われないか不安である	.655	.554
	⑪日本人と日本語で話したとき、私の発音が原因で日本人を不快な気持ちにさせないか不安である	.591	.635
	⑫日本人に発音を通じないとき、どうすればいいか分からないので不安である	.681	.548
	⑬日本人と日本語で話したとき、発音を通じないと、勉強不足を感じて焦る	.613	.471
対外国人発音不安	⑭発音が自分より上手な学習者と、日本語で話すのは恥ずかしい	.223	.815
	⑮他の学習者と日本語で話す時、自分の発音の誤りが明確に分かるので恥ずかしい	.405	.809
	⑯発音が自分より上手な学習者と話していると、自分が下手だと思われないか不安である	.323	.841
	⑰日本人と話しても気にならないが、その場に自分より発音が上手な学習者がいると恥ずかしい	.424	.769
	⑱発音が自分より上手な学習者と話していると、自分の発音が下手なことがはっきりわかるので恥ずかしい	.425	.804
	バリマックス回転後の因子負荷平方和	7.258	6.074
	回転後の累積因子負荷率 (%)	40.324	74.068
	信頼性 α	.965	.937

表 5 自尊感情の測定項目

だいたい、私は自分自身に満足している。
ときどき自分が全くダメだと思う。(R)
私は自分自身が多くの長所を持っていると感じている。
たいていの他人と同じように物事をこなすことができる。
私は自分自身について、自慢できる点をあまり持っていないと思う。(R)
時々自分が役立たずだと感じる。(R)
自分は少なくとも他人と同等には価値のある人間であると感じる。
自分のことをもっと尊重したいと思うが、なかなかできない。(R)
どちらかと言うと、自分は失敗した人間であると感じる。(R)
常に自分自身を肯定できる。
信頼性 $\alpha = 0.806$
※ R は反転項目

に、先述のように両因子の間に非常に強い相関が認められたため、今回のサンプル数を考えたうえで多重共線性の問題を生じる懸念が大きい。その場合、他の因数間の関係にまで影響を及ぼし、検証結果の妥当性を揺るがす可能性も考えられる。

自尊感情

自尊感情の尺度に関しては、最も広く使われる Rosenberg (1965) の Self-esteem Scale の日本語版 (山本ら, 1982) を採用した。なお、留学生に難しいと思われる日本語を易しい表現に修正した。具体的な質問項目ならびに信頼性係数は表 5 の示す通りである。

3.3. 仮説検証

まず仮説 1、3 を検証するために、GPA を従属変数に重回帰分析を行った。手順および結果をまとめたものは表 6 である。

モデル 1 では、コントロール変数として性別、年齢、国籍および学年を投入した。性別のみ GPA との間に強い相関が見られたことから、男子学生より女子学生のほうがよりよい成績を取めていることが伺える。

モデル 2 では、追加で日本語発音不安を投入した。ただし、発音不安は GPA との間に有意な相関が見られなかった。また、F の値も

表 6 GPA を従属変数とする重回帰分析

	モデル 1	モデル 2	モデル 3
(コントロール変数)			
性別	-.348*	-.350*	-.318*
年齢	.003	-.001	-.029
国籍	.016	.021	-.021
学年	.141	.146	.154
発音不安		-.054	-.055
自尊感情			-.140
授業参加度			.250*
R ² 乗	.131	.134	.185
調整済み R ² 乗	.091	.083	.117
F	3.240*	2.626*	2.698*

下がった。よって、仮説 1 は否定された。

モデル 3 では、さらに自尊感情および授業参加度を追加投入した。その結果授業参加度のみ、弱いものの GPA との間に正の相関が認められた。よって、仮説 2 も否定された。

続いて、仮説 2、4 を検証するために、授業参加度を従属変数に重回帰分析を行った。手順および結果をまとめたものは表 7 である。

モデル 1 では、コントロール変数として累積 GPA、性別、年齢、国籍および学年を投入した。全てのコントロール変数が授業参加度との間有意な相関がみられなかった。

モデル 2 では、追加で発音不安を投入した。発音不安と授業参加の間に強い負の相関

表7 授業参加度を従属変数とする重回帰分析

	モデル1	モデル2	モデル3
(コントロール変数)			
GPA	.209	.198	.216
性別	-.058	-.083	-.060
年齢	.082	.027	.016
国籍	.072	.103	.145
学年	-.036	-.008	-.023
発音不安		-.237**	-.139
自尊感情			.347**
R2乗	.067	.175	.252
調整済み R2乗	.014	.117	.191
F	1.256	3.036*	4.096**

が見られたため、仮説3は肯定された。

モデル3では、さらに追加で自尊感情を投入した。その結果自尊感情と授業参加度との間に、強い正の相関が認められた。加えて、発音不安と従属変数との間の相関が大幅に低減し、R2乗の値が上がった。以上のことから、自尊感情が発音不安の授業参加度に及ぼす負の影響への緩和効果が確認された。よって、仮説4が検証された。

4. 結論と考察

今回の調査により、2つの重要な知見が得られた。

第1に、日本語発音不安は学生の授業参加度に負の影響を及ぼす。発音不安が強いほど、学生の授業参加度が低くなる傾向が認められる。その結論は、先行研究とほぼ一致している。また、発音不安の強度は、個人の自尊感情に大きく影響される。具体的に、自尊感情が強い学生ほど、発音不安が低く、授業参加度が高い傾向にある。日本国内の研究では、自尊感情と言語学習の関係性を検討する研究は非常に少ないのに対し、海外では心理的アプローチによる分析はかなり普遍的である (Rubio, 2014)。その理論的空白を補ったのも本研究の貢献の1つと言えよう。

第2に、発音不安は学生の成績に影響しないことが証明された。仮説の導出段階では、筆者は発音不安が学生の授業参加度を媒介し、結果的に個人のGPAに影響すると予想していた。しかし予想に反し、発音不安は彼らの授業参加度にネガティブな影響を与えるものの、累積GPAとの間に有意な相関が認められなかった。日本語能力試験の公式説明によると、N2レベルとは「日常的な場面で使われる日本語の理解に加え、より幅広い場面で使われる日本語をある程度理解することができる」であるのに対し、N1レベルとは「幅広い場面で使われる日本語を理解することができる」である。したがって、大学の講義を理解するにはN1以上の日本語力が望ましい。一方、今回の回答者の場合、前章3.1の表1によると、回答者の平均日本語力はN2未満となっている。これは、発音不安と学生の成績の相関関係において、日本語レベルがモデレーター変数の役割を果たしている可能性を示唆している。つまり、中上級に達しないレベルの日本語学習者の場合、発音不安は殆ど他の専門授業の成績と無相関になる。なぜなら、発音不安よりも文法や語彙の不足の方が、授業内容の理解度や授業参加度などに、より大きく影響を及ぼすからである。日本語レベルの向上により、授業内容を理解し、加えて、自らの考えも言葉で表現できるようになった状態において、発音不安は授業参加を阻害する要因となり、結果的に成績にネガティブな影響を与えると考えられる。

5. 今後の課題

本研究はまだいくつかの課題が残されている。

まず統計的手法の不十分が挙げられる。変数の測定において、今回多重共線性の懸念から、発音不安を2つの下位次元に分けず、1つの変数として分析を進めた。しかし一方で、

対日本人発音不安および対外国人発音不安が個人の授業参加度に異なる影響を及ぼす可能性も考えられる。よって、より精緻な理論モデルを得るために、今後は再度調査してサンプル数を増やし、そのうえで因子分析以外の処理方法を模索することが必要であろう。

他方、先行研究では、母語によって発音不安の要因が異なると指摘するものも見られる(小河原, 2001a) ため、国籍と発音不安についての関連性についても今後検証が必要であろう。今回の調査では国籍と発音不安の間に有意な相関は見られなかった。理由として、1つはアンケート回答者の8割を中国出身者が占めており、この過度な偏りによって国籍の影響を読み取るのが難しいことが考えられる。また、内訳を見ると殆どの学生がアジア系で経済発展状況の近似した国に属している。発音不安に対し類似する認知を持っている可能性も否定できないため、国籍と発音不安の関係もさらなる調査・分析が求められる。

参考文献

- 小河原義朗 (1999a) 「外国人日本語学習者の日本語発音不安」『言語科学論集』3 p.13-24
- 小河原義朗 (1999b) 「外国人日本語学習者の日本語発音不安尺度作成の試み(1)」日本教育心理学会 第41回総会発表論文集 p.458
- 小河原義朗 (2000) 「外国人日本語学習者の日本語発音不安尺度作成の試み(2)」日本教育心理学会 第42回総会発表論文集 p.167
- 小河原義朗 (2001a) 「外国人日本語学習者の日本語発音不安尺度作成の試み(3)」日本教育心理学会 第43回総会発表論文集 p.278
- 小河原義朗 (2001b) 「外国人日本語学習者の日本語発音不安尺度作成の試み：タイ人大学生の場合」『世界の日本語教育. 日本語教育論集』11 p.39-53
- 元田 静 (2004) 「第二言語不安と自尊感情との関係(1) - 日本語学習者を対象として -」『言語文化と日本語教育』28号 お茶の水女子大学
- 日本言語文化学会 p.22-28
- 戸田貴子 (2009) 「日本語教育における学習者音声の研究と音声教育実践」『日本語教育』142巻 p.47-57
- 内田知宏・上埜高志 (2010)、「Rosenberg 自尊感情尺度の信頼性および妥当性の検討 - Mimura & Griffiths 訳の日本語版を用いて」、『東北大学大学院教育学研究科研究年報』58 (2) : 257-266
- 西谷まり (2013) 「外国人日本語教師不安尺度の開発」『一橋大学国際教育センター紀要』4 p.3-13
- 末延麻子 (2018) 「中国人日本語学習者の発音に対する考え方及び発音学習方法についての研究」『日本語教育方法研究会誌』25巻1号 p.34-35
- 福田倫子・小林明子・奥野由紀子編 阿部 新・岩崎典子・向山陽子 (2022) 『第二言語学習の心理 個人差研究からのアプローチ』くろしお出版
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982) 「認知された自己の諸側面」、『教育心理学研究』第30号、p64-68
- 湯地広樹・坂根健二 (2018) 「教諭論」における授業形態と学生の授業参加度との関係」、『鳴門教育大学授業実践研究』第17号、p.3-91
- 国際交流基金・日本国際教育支援協会 (2012) 日本語能力試験公式ウェブサイト <https://www.jlpt.jp/about/levelsummary.html> (2022年10月17日参照)
- 徳崎 進 (2015) 「マネジメントにおける KPI の意義を再考する」、ビジネス & アカウンティングレビュー、No.16, p17-36
- 独立行政法人 日本学生支援機構 (2022) 「2021 (令和3) 年度外国人留学生在籍状況調査結果」<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/data/2021.html> (2022年11月25日参照)
- A. K Korman(1976) Hypothesis of work behavior revisited and an extension, *Academy of Management Review*, 1, 50-63

- Brudan, A., (2013) *The KPI compendium: 20,000+ Key performance indicators used in practice*, Melbourne, Australia: KPI Institute
- Fernando, D. Rubio. (2014) Self-Esteem and Self-concept in Foreign Language Learning, *Multiple Perspectives on the Self in SLA*, Google books
- Kaplan, R. & Norton, D. (1996) Linking the balanced scorecard to strategy, *California Management Review*, 39(1), p53-79
- Rosenberg. M. J. (1965) When dissonance fails: on eliminating evaluation apprehension from attitude measurement. *Journal of personality and social psychology*, 1, 18-42
- Yashima. T. (2002) Willingness to communicate in a second language: The Japanese EFL context, *The Modern Language Journal*, 86(1), 54-66.